

ヨーロッパへのいざない

三岸節子は、49歳のときに初めてフランスを訪れ、その後63歳から20年余りをヨーロッパで過ごしました。今回の常設展では、アトリエを構えたフランスや旅先で描いた風景画を中心に、渡欧以前の作品もあわせて展示します。

画業初期の風景画とヨーロッパへの憧れ

節子は、画業初期には静物画、室内画を多く描きましたが、一方で風景画も残しています。初期の《風景》(No.2)では、木々と崖に囲まれたわらぶき屋根の民家が見えます。茶と緑の落ち着いた色彩で描かれた素朴な風景は、節子の夫である三岸好太郎も題材としており、二人で一緒に写生に訪れた我孫子の風景だと考えられています。土と自然を主題に朴訥(ぼくとつ)に描く作風は、この頃春陽会でも流行した、いわゆる「草土社風」(注1)を示します。また、独立美術協会に出品され、初入選を飾った《花・果実》(No.3)は、原色の豊かな色彩が用いられ、フランスで流行したフォーヴィスム(野獣派)の影響がうかがえます。節子の中にあつたヨーロッパへの憧れが作中にも表れています。



《風景》 1920年代 ©MIGISHI

初渡欧と原始美術への回帰

ヨーロッパへの強い憧れから、戦後の1954(昭和29)年、49歳のとき、節子は念願の初渡仏を果たします。先にフランスへ私費留学をしていた息子黄太郎を頼りに、3ヶ月間、パリ、カーニュ、さらにはスペイン、イタリアを旅行します。それまで屋内で作品を制作することが多かった節子ですが、この旅行ではレンガの道や建物といった見慣れない海外の風景をスケッチしています(No.6、7)。同時に、日本の風土から作られた独特の魅力にも気づいたといい、帰国後は、日本の原始美術である埴輪や土器が作中に登場し、あたたかみのある画風を展開します(No.8)。



《イル・サンルイ》 1954年 ©MIGISHI



《細い運河》 1974年 ©MIGISHI

二度目の渡欧と風景画家としての活躍

一度目の渡仏から14年後の1968(昭和43)年、63歳のとき、異国の風景が忘れられなかった節子は、再び息子黄太郎一家とフランスへ渡り、南東部のカーニュに住むようになります。1974(昭和49)年には、パリの画廊からの依頼を受け、「花とヴェネチア展」と題した個展を開催します。展示室には、《小運河の家(1)》(No.12)、《細い運河》(No.13)などの、イタリアを中心とした海外の風景画が多く並べられました。節子の個展は高い評判を呼び、異国の地で風景画家として名を広めました。これを受け、節子は帰国の予定を変更し、ブルゴーニュ地方ヴェロンにアトリエを構え、制作を続けました。節子の二度目の渡欧は、1989(平成元)年に神奈川県大磯町に戻るまでの20年間という長期に及びました。

三岸一家の描いた風景

節子が海外で暮らしながら、作品の題材を探すうちに「やっと思い通りのモチーフに出逢えた」(注2)と感じたのは、スペインの風景でした。《小さな町(アンダルシア)》(No.20)のように、白い壁に素焼きの赤い屋根瓦の家が並ぶ風景は、作品の中に切り取られ、鮮やかに描かれています。節子とともにパリのアパートで制作に励んだ黄太郎は、アパートから見える風景を《わが家よりのエッフェル塔》(No.25)と題して描いています。青くぼやけたパリの街並みの中で、堂々としたエッフェル塔が空高くそびえています。また、1934(昭和9)年に31歳の若さで早逝した夫の好太郎は、初期から風景画に取り組んでおり、《風景》(No.24)のように青や緑を基調とした作品を手がけました。今回の展示では、好太郎と節子、息子黄太郎の風景画が並んでいます。異なる魅力を見せるそれぞれの風景画をお楽しみください。



《小さな町(アンダルシア)》 1987年 ©MIGISHI

(注1) 草土社は1915(大正4)年に岸田劉生らによって結成された美術団体。当時団体内外で、岸田の作品に代表されるような露出した土や崖、草々を徹底して緻密に描く「草土社風」風景画が流行した。1922(大正11)年に設立された春陽会には草土社の画家たちも参加していた。

(注2) 三岸節子『三岸節子ヨーロッパ デッサン集 1954-1989 旅へのいざない』求龍堂、1997年